

フランシスコ・ザビエルが携わったアジアにおける 語学教育

著者	泰田 伊知朗
著者別名	Ichiro TAIDA
雑誌名	観光学研究
巻	18
ページ	117-125
発行年	2019-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00010525/

フランシスコ・ザビエルが携わったアジアにおける語学教育

Francisco Xavier and Language Education in Asia

泰田 伊知朗
Ichiro TAIDA

[要旨]

フランシスコ・ザビエルはヨーロッパを出てからインド、東南アジア、日本などで布教活動を行った。現存する彼の手紙の中では、ゴアとマラッカでのラテン語教育に関する言及がしばしば見られる。だが日本に関してはそうした記述はない。ラテン語教育に関し両都市と日本の間に違いが生じた大きな理由として、ザビエルの時代にはゴアとマラッカはすでにポルトガルの植民地であったのに対し、日本はそうではなかったということが想定されうる。この推測を確認するにあたって、本稿ではゴアとマラッカの政治状況とその中でザビエルが推進したラテン語教育について概観する。そして両都市と日本におけるザビエルの状況を比較してみたい。

[キーワード]

フランシスコ・ザビエル、イエズス会、語学教育、ラテン語、日本、ゴア、マラッカ

日本に初めてキリスト教を伝道したとされるフランシスコ・サビエルは、1541年にヨーロッパを出発し、アジアへと向かった。彼の手紙の中で今日残っているものは、インド、東南アジア、日本における彼の布教活動を伝えるものが主である。手紙の中で彼はしばしば、特にゴアとマラッカにおける学校の設立とラテン語教育について述べている。ラテン語はイエズス会において公式の言語であり、ヨーロッパのイエズス会の学校でも教えられていた。一方、彼が日本においてラテン語教育を進めようとしたという記述は見られない。

両都市と日本の間にラテン語教育に関して違いが生じた大きな理由として、ザビエルの時代にはゴアとマラッカはすでにポルトガルの植民地であったのに対し、日本はそうではなかったことが想定されうる。この推測を確認するにあたって、本稿ではゴアとマラッカの政治状況とその中でザビエルが推進したラテン語教育について概観する。そして両都市と日本におけるザビエルの状況を比較してみたい。

ゴアとイエズス会の教育

ゴアは1510年からポルトガルの植民地となったが、絶対的な支配権が確立されたのは1543年からである¹。植民地政府は1540年代に入ると方針を変更し、宣教師たちの助言に従い現地の人々にキリスト教に改宗するよう積極的に促した。結果、多くのヒンドゥー教の寺院が破壊された²。

宣教師たちが数多くゴアに渡って来た。最初にフランシスコ修道会が1517年に、次にドミニコ

修道会、アウグスチアヌス修道会、そしてイエズス会と続く³。フランシスコ会はゴアにおいて教育を開始し、1542年までに彼らは管轄地内に11の修道院、3つの学院、80の宿舎を設立した。中でもレイス・マゴス学院はゴアの北、バルデズ半島に位置し、16世紀後半におけるフランシスコ会の活動拠点になった。当時その地域におよそ7000人のキリスト教徒がいたとされる⁴。

ラテン語教育も始まった。信仰友愛会(The confraternity of the Holy Faith)がゴアの司教総代理ミゲル・バズと、神学学者であり訓戒者であるディオゴ・デ・ボルバ⁵によって1541年4月24日に設立された。その目的はキリスト教信仰を広め、若い改宗者たちに教育を施すことにある。また地元の少年たちのために神学校が建てられることも決まった。そこで彼らは読み書き、およびポルトガル語とラテン語の文法、そしてキリスト教教義と神学を学ぶことになる⁶。これはインドおよび世界各地で働く宣教師たちを育てるための神学校として計画された⁷。

この学校がイエズス会によるセントポール学院(セントポールカレッジ)の前身である⁸。セントポール学院が設立される前、1542年にザビエルはゴアに到着し、同年9月20日付の手紙で当地の学生たちのラテン語学習について報告している。「ディオゴ神父が責任を持っているこの地方の少年たち〔だけでも〕六〇人以上になっています。これら少年たちは、この夏から学院で生活するでしょう。少年の多く、ほとんど全部が、聖母の聖務日課を読み、祈ることを知っていますし、多くの者は書くこともできます。彼らはラテン語を教わることができるほど進歩しています⁹。

セントポール学院はイエズス会のゴアでの活動拠点となった¹⁰。ザビエルは学院について以下のように報告している。「総督はこの学院を設けることは、主なる神への大きな奉仕であり、この地方に極めて必要なことであるとお思いになり、そのために建物を増やし、短期間に完成させようとなさっています。学院の中に建てる聖堂は非常に立派なものです。基礎工事はすでに終わり、壁もできて、今は屋根を葺いています。この夏には、新しい聖堂でミサが捧げられるでしょう。ソルボンヌ学院の聖堂の二倍ぐらいの大きさです。学院は一〇〇人以上の学生を収容できるだけの資金をすでに持っています。すべての人びとは〔学院を設立することは〕非常によい仕事であると思っていますので、毎日たくさんの基本財産の寄附があります」(1542年9月20日付の手紙)¹¹。

1543年に建設が完了し、セントポール学院はイエズス会の管理下に入る¹²。同年教育も開始され、1545年にはイエズス会がこの学院に対し全責任を負うことになった¹³。初等学校も学院の横に設立され、そこで生徒たちは読み書き、算数、キリスト教教義などを学んだ¹⁴。この学院は50以上の部屋と2つの寄宿舎を備えている。一つには30人のポルトガル人の少年たちがおり、もう一方には70人のインドの少年たちがいた¹⁵。1545年には7歳から21歳までの学生が60人いたとされる。1552年には300人、1556年には450人、1564年には700人と着々と増えていく¹⁶。学生は世界各国から集まって来た若者である。ヒンドゥー教徒、シンハラ人、モルッカ諸島出身者、中国人、日本人、エチオピア人など様々だった¹⁷。

学院ではイエズス会士たちが初級のラテン語から上級の神学にいたるまで様々なことを教授していた¹⁸。読み書きができるものはまずギムナジウムへの入学が許され、そこでは人文系の教育を受ける¹⁹。文法の3つのクラス、および詩やキケロ、ヴェルギリウス、オヴィディウス、セデリウスなどの作品を中心とした人文科学系の1クラスなどである²⁰。ギムナジウムからは教養学部に進学し、文学士号取得へと至る²¹。セントポール学院は大学で、ソルボンヌ大学に準ずるカリキュラムを有していた²²。ザビエルは1544年1月15日付の手紙で以下のように報告している。「昨年、ゴ

アに設立する学院について報告いたしました。その学院にたくさんの学生が入ってきました。さまざまな異なる言語を話す人たちで、すべて未信者の家庭で生まれました。学院の中にはたくさんの建物が建てられ、学生のあるものはラテン語を、他のものは読み書きを学んでいます²³。

この学院の教師は主に聖職者たちが務めた²⁴。1544年ポール・カメルト神父がこの学院の事業に参加し、青少年たちにラテン語を教えた。またニコラス・ランチロット神父は1545年にこの学院の院長を務めることになった²⁵。ラテン語教師としてのランチロット神父について、ザビエルはしばしば言及している。例えば1545年11月10日付の手紙には「〔ニコラス・ランチロット〕は聖心学院にとどまり、ラテン語を教えるようにします²⁶」、同年12月16日付の手紙には「またニコラス・ランチロット神父はポルトガルから来るときに定められたように、聖パウロ学院でラテン語を教えるために〔ゴアに〕残りなさい²⁷」とある²⁸。

他にも、ザビエルはイエズス会総長のイグナティウス・ロヨラにラテン語教師を送るよう求めている。「このようにあなたに報告いたしますのは、こちらでラテン語を教えるのに専念できる人を、そちらで準備していただきたいからです。その人がこちらへ来れば、たいへん忙しいでしょう²⁹」。またインド総督マルチン・アルフォンソ・デ・ソーサも同様のことを要請していたことをザビエルは報告している。「総督は三人の聖職者と一人のラテン語教師がローマから来ることを期待しておられます³⁰」。

イエズス会は他にも学校を設立した。例えば、彼らはゴアのマルガオに別の学院と学校を建設している³¹。また南インドのコーチンに建てられた学院は、アジアの若者に教育を行い、洗礼を望む若者たちのためには別の教室も備えていた学術的な拠点であった³²。さらにザビエルはランチロットを南インドのクイロン（今のコッラム）に養生のために送ったが、彼はそこに学院を立てる計画を持っていた³³。1608年までにはゴアに少なくとも15のイエズス会の学校があったとされる³⁴。ザビエルは漁夫海岸を1548年に訪れたが、ゴアと同じくそこでもすべての教区で学校を建てるようにイエズス会士たちに要請している。イエズス会は人里離れた村に学校を設立し、インドにおいてそれまで何世紀にも渡って虐げられてきた人々に教育を施した。これはインドの教育界において、イエズス会士たちによる革命的な一歩であった³⁵。

マラッカとイエズス会の教育

1545年にザビエルがマラッカを初めて訪れる前に³⁶、1511年にポルトガル人アフォンソ・デ・アルブケルケがマラッカ王国を征服し、ポルトガルはマラッカへの支配権を確立していた³⁷。アルブケルケは教会を建てるよう命じ、キリスト教を広めることに尽力した。洗礼を受け、教会に入ろうとする者たちを厚遇したと言われる³⁸。マラッカ征服以降、ポルトガル王国は行政者、兵士、商人たちの拠点とするためにも、そこにキリスト教徒のコミュニティを建設することを支援した³⁹。従ってザビエルがこの都市にやって来た時には、キリスト教がすでに広まっており、彼は地元の人々からも好意的に迎えられている⁴⁰。

ザビエルはマラッカでもキリシタン学校の設立に携わった。早くから学校を設立したために、「学校」を意味するマレー語の *sekolah* は、ポルトガル語の *eskola* から借用されたものである⁴¹。イエ

ズス会はマラッカでもラテン語を教えた。1548年4月2日付のザビエルの手紙には以下のようにある。「マラッカへ2人の会員を派遣します。[...] もう一人（ロケ・デ・オリヴェイラ）は神父ではなく、ポルトガル人の子女たちに読み書きを教え、聖母の小聖務日課、〔悔い改めの〕七詩編、亡き祖先たちの靈魂のために死者の聖務日課を唱えることを教えたりするためです [...] ポルトガル人の子女には〔その程度に〕合わせ、ラテン語の文法を教えるのに適当だと〔思われる〕子弟には、教科の進行にしたがい〔ラテン語を〕教えるように頼んでおきました」⁴²。

この手紙にあるようにザビエルはロケ・デ・オリヴェイラをゴアからマラッカに送り⁴³、オリヴェイラはそこでイエズス会によるポルトガル語とラテン語を教えるための学校を開いた。数日で180人の学生が集まったとされる。彼らは、ポルトガル人の子供やカトリックの混血児や、カトリックへの転向者などである⁴⁴。この学院はインドネシアの島々や中国や日本から来る学生たちをトレーニングするための地域の拠点となった⁴⁵。ザビエルはオリヴェイラのラテン語教育について、1549年6月22日付の手紙で言及している。「ロケ・デ・オリヴェイラは子供に読み書きを教えています。子供に教えることは苦勞の多い仕事ですが、この地方にとっては少なからぬ利益となっています。彼〔のところ〕へ大勢の少年が集まって来て、一つの組には読み書きを、他の組にはラテン語を教えています。少年たちのうちにはたいへん進歩した者もいますし、学びたいと思っていたことを十分に学んだ者もいます。彼らは公教要理を読んだり、聖母マリアの小聖務の時課を唱えたり、行儀よく修道者のように慎み深い態度で主なる神に恩寵を与えてくださるよう願ったりしています」⁴⁶。

ザビエル来日当時の日本の状況

ザビエルのおかれた環境についてゴアとマラッカと比較すると、日本は大きく異なる。これら2つの都市はザビエルが到着した時すでにポルトガルの植民地であり、キリスト教の布教も広がっていた。両都市では、ザビエルは地元の人々に喜んで迎えられており、ラテン語を教えるための学校を建設することに大きな障害はなかったようである。そしてその学校には地元の者やポルトガル人たちの子弟をはじめさまざまな国の学生が入学し、イエズス会の活動拠点ともなった。

逆にザビエルが日本に来た時は、西洋人もわずかで、キリスト教及びヨーロッパ文化は根付いていなかった。また彼は日本人たちに必ずしも歓迎されていたわけではない。1549年8月に鹿児島に上陸してからすぐ、彼は布教活動を始めた。しかし聴衆の中には彼の発音や身振り動作を嘲ったり、彼のことを狂人扱いする者さえいた⁴⁷。ザビエルは手紙の中で以下のように述べている。「神の教えを聞いて多くの人びとは喜びましたが、ある人たちは神の教えをあざ笑い、またある人たちは嫌悪しました」⁴⁸。山口でも彼はキリスト教に興味を示した者の家や路上などで布教活動を行なったが、改宗したものは多くなかった⁴⁹。彼と仲間が京都を目指したが、道中、戦乱や盗賊などのために危険にさらされ、真冬だったために寒さにも苦しんだ⁵⁰。ザビエルは、日本において非常に苦勞したことを1552年1月29日付のコーチンからの手紙で述懐している。「主なる神が日本におけるさまざまな困苦と危険から私を守ってくださったことを考え合わせながら、この手紙をしたためております。[...] 日本において数かずの苦勞や危険にさらされて自分自身を見つめるまでは、

私自身が自分の内心の外にいて自分の中に〔どれほど〕たくさんの悪がひそんでいたか、認識していなかったからです⁵¹。

さらにザビエルは僧侶たちの迫害の中で布教活動を行っていた。彼はしばしば僧侶との争いについて述べているが、例えば鹿児島では僧侶たちが領主の島津貴久に次のように請願したことを報告している。「ボンズたちは領主に迫って、もしも領民が神の教えを信じることを許すならば、領地を失い、また神社仏閣は破壊され、領民は離反するだろうと言いました。〔…〕ボンズたちはキリスト信者になったものは、誰であっても死罪に処すと領主が命ずるように〔策謀〕して成功し、それで領主は誰も信者になってはならないと命じました⁵²。また僧侶たちと不仲であることを述べる。「私たちがボンズたちの欺瞞をあばくので、彼らと私たちは仲が良くありません⁵³。また「多くの人びとが信者になってゆくを見て、ボンズたちはたいへん悲しみ、信者になった人たちを叱りつけて〔…〕」とも言っている⁵⁴。

ザビエルはゴアとマラッカで学校設立に携わったが、日本でも1552年に山口に学校を建てた⁵⁵。だが、その学校の目的はラテン語を若者に教えることではなく、ヨーロッパから来るであろう身分の高い宣教師を手助けする通訳を育成することだった⁵⁶。

ザビエルは日本でラテン語教育を広めることはなかったが、その後アレッサンドロ・ヴァリニャーノが1579年来日してからのち、イエズス会士による組織的なラテン語教育が行われるようになる。当時日本のキリスト教徒は劇的に増加しており、1579年には10万人、1581年には15万人に達していたと言われる⁵⁷。戦国武将の中でもキリスト教徒を保護する者が現れた。織田信長と有馬晴信はセミナリヨと呼ばれる学校を設立するための土地をイエズス会士たちに提供した⁵⁸。さらに印刷機も輸入され数多くのラテン語関連の書籍も印刷された。こうしてヴァリニャーノの時代の日本では、組織だったラテン語教育が行われたのである⁵⁹。

ゴアとマラッカにおけるザビエルの滞在大およびヴァリニャーノがいた頃の日本の状況を、ザビエルの日本滞在与比較してみれば、ザビエルがいかに厳しい環境に置かれていたか明白である。このような余裕のない状況でラテン語教育を開始することは困難であろう。逆に言えば、ゴアとマラッカではキリスト教が広まっていたこと、すでにポルトガルの植民地であったことが、イエズス会によるラテン語教育の充実を可能にしたのである。またヴァリニャーノが日本でラテン語教育を推進することができた間接的な理由としても、キリスト教徒がすでに多くいたこと、友好的な領主がいたことが挙げられるだろう。そのどちらも日本では欠いていたザビエルには、ラテン語教育の開始は困難であった。

もちろんザビエルは、日本人がラテン語教育に値しないと考えていたわけではない。彼は手紙の中で日本人がいかに優秀か論じている。「この国の人びとは今までに発見された国民のなかで最高であり、日本人より優れている人びとは、異教徒のあいだでは見つけられないでしょう⁶⁰。さらに知性の面でも評価する。「大部分の人は読み書きができますので、祈りや教理を短時間に学ぶのにたいそう役立ちます⁶¹。「彼らはいへん善良な人びとで、社交性があり、また知識欲はきわめて旺盛です⁶²。「日本人はいへん立派な才能があり、理性に従う人たちなので、これこそ真理であると思ひ、信者も信者でない人もキリストの奥義を喜んで聞きました⁶³。

彼は、この国での布教が将来益々盛んになることを予言している。例えば来日して3ヶ月ほどたった1549年11月5日付のゴアのイエズス会員宛の手紙で、「二年もたたないうちに、あなたがた

のうちの多くの人たちに日本へ来るように命令することがあると思いますので」⁶⁴と述べている。さらに1551年末に日本を離れた後も以下のような手紙をしたためている。「この一五五二年四月には、インドから日本へ神父たちが行くでしょうし、[...] 日本の人びとは慎み深く、また才能があり、知識欲が旺盛で、道理に従い、またその他さまざまな優れた資質がありますから、彼らのなかで大きな成果を挙げられないことは〔絶対に〕ありません」⁶⁵、「日本の地はキリスト教を長く守り続ける信者を〔増やす〕ためにきわめて適した国ですから、〔宣教のために〕どんなに苦勞をしても報いられます」⁶⁶。

最初に述べたように、現存するザビエルの手紙の中には日本におけるラテン語教育に関する記述はなく、実際日本ではラテン語教育を組織的に行うことはなかったのだろう。だが彼は日本人のことを高く評価しており、ゴアとマラッカと同様に日本でもラテン語教育をすることを考えることもあったはずである。だがそれは彼の置かれた状況では許されなかった。彼の思いは次世代に引き継がれることになる。日本と日本人を賞賛する彼の情報は、後から日本に来るイエズス会士たちに伝わり、彼らによって日本でも学校が設立され、ラテン語教育が行われるようになるのである。

[注]

- 1 松川 (2006 : 229)。
- 2 松川 (2006 : 231)。
- 3 松川 (2006 : 229)。
- 4 Lach (1965 : 262)。
- 5 ミゲル・バズとディオゴ・デ・ボルバについては Xavier (1993 : 112) 参照。
- 6 Abreu (2012 : 9)、Xavier (1993 : 179)、Fernando (2018 : 2)。
- 7 Fernando (2018 : 2)。
- 8 Xavier (1993 : 179)。
- 9 河野 (1985 : 94-95)。
- 10 Lach (1965 : 263)。
- 11 河野 (1985 : 91)。
- 12 Abreu (2012 : 10)。
- 13 Fernando (2018 : 2)。
- 14 Fernando (2018 : 2)。
- 15 Xavier (1993 : 179-180)。
- 16 Xavier (1993 : 180)。
- 17 Lach (1965 : 263)。
- 18 Lach (1965 : 263)。
- 19 Xavier (1993 : 181)。
- 20 Xavier (1993 : 181)。
- 21 Xavier (1993 : 181)。
- 22 Xavier (1993 : 181)。
- 23 河野 (1985 : 115)。
- 24 Xavier (1993 : 182)。
- 25 Abreu (2012 : 10)、Xavier (1993 : 181)。

- 26 河野 (1985 : 221)。
- 27 河野 (1985 : 228)。
- 28 そのほかにも 1546 年 5 月 10 日付の手紙を参照 : cf. 河野 (1985 : 235)。
- 29 河野 (1985 : 95)。
- 30 河野 (1985 : 95)。
- 31 Fernando (2018 : 2)。
- 32 Lach (1965 : 265)。
- 33 河野 (1985 : 386)。
- 34 Fernando (2018 : 2)。
- 35 Fernando (2018 : 4)。
- 36 Teixeira (1961 : 98)。
- 37 Loureiro (2008 : 78)。
- 38 Teixeira (1961 : 85)。
- 39 Lach (1965 : 286)。
- 40 Teixeira (1961 : 98)。ザビエルがマラッカに到着した時の様子について、パウロ・ゴメス神父が以下のように語っている : “I saw with my own eyes Fr. Xavier landing at Malacca for the first time; the inhabitants ran to the port to receive him. They were all shouting with joy : - the Holy Father is coming.” Cf. Teixeira (1961 : 326)。
- 41 Ozay (2011 : 38)。
- 42 河野 (1985 : 312)。
- 43 Teixeira (1961 : 355-356)。
- 44 Coleridge (1872 : 43)、Winstedt (1956 : 45)。マラッカの学校については、Teixeira (1961 : 98-99) も参照。
- 45 Kalapura (2012 : 98)。
- 46 河野 (1985 : 440)。
- 47 Schurhammer (1982 : 109)。
- 48 河野 (1985 : 527)。
- 49 Schurhammer (1982 : 443)。
- 50 Schurhammer (1982 : 443-444)。
- 51 河野 (1985 : 549)。
- 52 河野 (1985 : 526)。
- 53 河野 (1985 : 534)。
- 54 河野 (1985 : 530)。
- 55 河野 (1985 : 626-627)。山口の学校については、ザビエルは次のように述べる。「毎年イエズス会の神父たちが日本へ行くことになるでしょう。そして山口にイエズス会の修院を建て、日本語を学び、〔日本の〕各宗派の教理を研究することになるでしょう。それでこれら〔日本の〕大学へ行って〔宣教する〕ために、〔とくに選ばれ、学識もともに豊かで〕大いに信頼される人物が日本へ渡る場合、山口には日本語をよく話し、各宗派の誤謬をよく知っているイエズス会の神父や修道者がいることになり、日本へ行くべくヨーロッパで選ばれる神父たちにとっては、〔現地で万全の処置ができるのですから〕大きな助けになるでしょう」。Cf. 河野 (1985 : 542)。
- 56 河野 (1985 : 542, 558-559, 608, 626)。
- 57 Taida (2017 : 568)。

- 58 Taida (2017 : 569-570)。
59 日本におけるイエズス会のラテン語教育については、Taida (2017) を参照。
60 河野 (1985 : 471)。
61 河野 (1985 : 472)。
62 河野 (1985 : 472)。
63 河野 (1985 : 526)。
64 河野 (1985 : 475)。
65 河野 (1985 : 540)。
66 河野 (1985 : 554)。

[参考文献]

- Abreu, S. (2012). 'Contribution of Jesuits to higher education in Goa : historical background of higher education of the Jesuits', in I. Arellano and C. M. Induráin (eds.), *St Francis Xavier and the Jesuit Missionary Enterprise: Assimilations between Cultures/San Francisco Javier y la empresa misionera jesuita: Asimilaciones entre culturas* (Pamplona), 9-21.
- Coleridge, H. J. (1872). *The Life and Letters of St. Francis Xavier, Vol. II* (London).
- Fernando, L. (2018). 'Jesuits and India', *Oxford Handbooks Online* (Oxford) (22 Sep. 2018 accessed) .
- Kalapura, J. (2012). 'The legacy of Francis Xavier: Jesuit education in India, 16th-18th centuries', in I. Arellano and C. M. Induráin (eds.), *St Francis Xavier and the Jesuit Missionary Enterprise: Assimilations between Cultures/San Francisco Javier y la empresa misionera jesuita: Asimilaciones entre culturas* (Pamplona), 91-111.
- Lach, D. F. (1965). *Asia in the Making of Europe, Volume I: The Century of Discovery, Book One* (Chicago).
- Loureiro, R. M. (2008). 'Historical Notes on the Portuguese Fortress of Malacca (1511-1641)', *Revista de Cultura*, 27, 78-96.
- Ozay, M. (2011). 'A Revisiting Cultural Transformation: Education System in Malaya During the Colonial Era', *World Journal of Islamic History and Civilization*, 1 (1), 37-48.
- Schurhammer, G. (1982). *Francis Xavier: His Life, His Times, Volume IV, Japan and China, 1549-1552*, translated by M. J. Costelloe, S. J. (Rome).
- Taida, I. (2017). 'The earliest history of European language education in Japan : focusing on Latin education by Jesuit missionaries', *Classical Receptions Journal*, 9 (4), 566-586.
- Teixeira, M. (1961). *The Portuguese Missions in Malacca and Singapore, Vol. I - Malacca* (Lisboa).
- Winstedt, R. (1956). *Malaya and its History*, 4th edition (London).
- Xavier, P. D. (1993). *Goa: A Social History* (Goa).
- 河野純徳 (訳) (1985), 『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』, 東京.
- 松川恭子 (2006), 「宣教師による現地語のテキスト化とその帰結: インド, ゴア州におけるキリスト教徒の言語アイデンティティの現在」, 『国立民族学博物館調査報告』, 62, 227-251.

Francisco Xavier and Language Education in Asia

Ichiro TAIDA

[Abstract]

Francisco Xavier was a Jesuit missionary. He left Europe for Asia to propagate Christianity. The existing letters of Xavier described his missionary works which were mainly in India, Southeast Asia and Japan. He often talked about the establishment of schools and Latin education, especially in Goa and Malacca. However, he did not refer to the establishment or the possibility of Latin education in Japan. The purpose of this paper is to discuss why he promoted Latin education in Goa and Malacca, but not in Japan. When considering this matter, I will compare the local situations and Latin education in Goa and Malacca with that of Japan's.

[Key words]

Francisco Xavier, Society of Jesus, Language Education, Latin, Japan, Goa, Malacca